

ひとを育てる活動

給食は大切な学びの時間

－ ラムアフス小・マリオ先生の報告 －

7月に新学期が始まり、週2日の給食の日には、全校児童81人がそれぞれ薪や野菜を持って登校します。

給食は家庭科の授業の一環であり、5、6年生は先生の指導のもと、当番の母親たちとともに安くて栄養ある食事づくりを学ぶ機会となっています。自分の家で給食のメニューを取り入れる児童もいます。

給食の実施で体調を崩す子どもが減り、平均体重も確実に増えています。続けて支援をお願いできればと思っています。



ラムアフス小の配膳タイム(右上がマリオ先生)

－ アトモロック小ディダン先生の報告 －

給食が始まって5年、子どもたちは授業に集中できるようになり、すべてに積極的になっています。家庭の食事とは全く違うメニューなので、学校に来るのを楽しみにしており、晴れた日は1年から6年まで113名の子どもたちがマグロ山麓に広がる校庭で食事をします。心身の成長に役立っている給食のご支援を今後とも続けていただけたら嬉しいです。

<給食支援の継続について>

「児童がお弁当を持って登校できるまで」との要請により、農業研修ほか収入向上事業とともに始めた期限付き給食は、1回更新して6年目に入りました。今年度は会員、野のゆり会、「WE21 ジャパンさいわい」から、計26万円の支援をいただいています。児童数約328名、1人1食10円の予算です。

マリオ先生、ディダン先生の報告のように給食の意義は大きく、来年度も継続する予定です。(事務局)

やはり先住民族の医師を育てたい

－ カレッジ学生アナリンさんの選択への反応 －

前号で、医師への夢は捨てないが、まずは就職して家族を助けたいというMSU生物学専攻4年のアナリンさんの選択をお伝えしました。その後会員の中から医師になるには何年かかり、その学費は？できるなら一人前になるまで家族の生計を支援したい、という問い合わせをいただきました。

ビラーン民族の医師と弁護士を育てることは代々のCMIP事務局長の夢でもあります。会員からの医師育成への強い関心をエドウィン神父に伝えたところ「大卒の場合は6-8年ぐらい必要。ボルルールに医師への道がより近い現役看護師がおり、この女性の意思や条件を確認したい」という返事が届きました。

1950年代からミッションの拠点だったボルルールには、キリスト教系奨学金などで育成された人材が多くいます。この看護師もその一人で、国家試験に合格後、正看護師として働いているようです。

HANDS奨学金で懸命に学ぶアナリンさんにも将来の医師候補の期待を寄せつつ、ビラーン民族医師誕生の夢を、皆で育てていきたいと思います。

ブラクール校・先住民族学校の総合教育

－ その後 －

総合教育のなかの調理実習について、「家事の手伝いをしていけば必要ないだろう」と思っていたが、考えを改めました。写真はハイスクール4年のシェリルさん(左端)とジャンリルくん(右端)が、実習室でポルボロンというお菓子を作っているところです。ピーナッツの粉・砂糖・スキムミルク・マーガリンを水で練り、セロファン紙に包んだこのお菓子は子どもおとなも大好き！1個1ペソで販売します。でもふたりの家では、こういったお菓子を作ったことはありませんでした。これはお小遣い稼ぎではなく、確実に家計を助ける技術だと納得しました。しかし学生たちには材料を購入する資金がありません。PFPに、材料費を購入するための初期費用支援を要請するそうです。

